

新・平家物語

第七卷

新・平家物語 第七卷 (全十二卷)

定 価 三五〇円

昭和三八年二月二五日第一刷発行

著 者 吉川英治

発行者 伴 俊彦

印刷所 大日本印刷株式会社

発 行 所 東京 小倉 大阪 名古屋 朝日新聞社

© 吉川英治 一九六三年

第七卷目次

くりからの巻(続)

三

一門都落ちの巻

一二九

京乃木曾殿の巻

三三九

装幀 NDC 原 弘

くりからの巻(続)

仙童

こんどの北国発向には、平家はおそらく、前代未聞な大軍をそろえるであろうと、もっぱらな評判だった。洛中の色めきだけではない。六波羅みずからも「かつてお召しなき西海、中国、四国の領家にまで、急ぎ上れよとのおさたあつたれば、総勢十万騎にも及ぼう」と、声を大にしていつている。

日一日と、異様なまでに、戦時色が濃くなつてゆく。公卿僉議も開かれた。

この大集議には、三位以上、のこらず列座というところになつてゐる。ここではないとも、平家へのいやがらせだの、難題だの、何か、公卿感情がうごめいて済まないのが常例であるが、このたびは違つてゐた。

議目の決定は、いつになく快くすすみ、上卿たちも積極的だし、まただれよりも後白河が、

『すみやかに、木曾を討ち平げ、しかる後に、鎌倉

を』と、旺なるおことばで、宗盛以下の一門を、励まされた。

法皇にも、特に、御意識のうえかもしれない。

さきの山門御幸のことでは、院と平家とのわだかまりもある。このさい、——平家一期の浮沈ともいえる大難局を扶けておくことは、一切の解決にならう。——そういうありがたいお考えによるものと、宗盛などは、まづ先に感激した。

法皇には、なおまた「片道を賜う」という特別な措置をゆるされた。

往きの軍費兵糧の不足などは、途中途中の国や郡の役所で、公の租税や貢物を徴発して用に当てるもさしつかえない。——とする令を「片道を賜う」という。

ともあれ、清盛が在りし日のようでは無いにしても、なお、平家の強大な潜勢力は「眼にも見よ」とばかり、都の内に、充ちあふれた。——およそ、召しをうけて馳せ参じた将士の国ぐには。

東海道では、伊賀、伊勢、尾張、三河の大部分。

東山道では、近江、美濃、飛驒、信濃の一部。

北陸では、若狭一國。そのほかは、いるところの地方で参陣の約束である。

畿内の兵馬はもちろん総てだ。——山陰、山陽、西海の將兵さえも参加している。十万余騎と号するも、あながち、誇大とは思われない。

けれど、じつさいは、おそらくその半数以下であつたらう。それだけでも、当時の洛中の総人口に匹敵する。しかも、時は、飢饉つづきの悪歲だった。たとえ幾日でも、むなしく、これだけの口数の者を、都にこつた返してはおかれない。

寿永二年四月二十七日の辰ノ一点(午前八時)——まずその第一陣が都を立つた。

以後。

朝となく夜となく、毎日毎日、北陸へさしてくだる兵馬はひきもきらない壯觀であつたらしい。「玉葉」によると、それは、二十三日のきょうに至つて、やつと終つたと、書いてある。

『有教。ゆうべから、前の軍勢は、すこしも進み出ないではないか』

『まことに、はたと、駐つておりますな』

『どうしたことぞ』

『先陣から先陣と、行きつかえているものとみえます。すでに、ここは湖北の海津。これから北は、越前の国境で、七里半越えとか、愛発越えとか、敦賀までは、山ばかりでございますし』

『むなしく、馬をとめて、若葉のよい季節を、倦んでいるのも知恵がない。——有教、供をせい』

『どこへいらつしゃいますので』

『小舟で、竹生島へ渡ってみよう。そちは、櫓があやつれるか』

『櫓は、守教がよくいたしまする』

『では、守教も、供に呼べ』

皇后宮亮経正は、琵琶湖のなぎさへ出て、小舟に乗つた。

きのうから、行軍の先がつかえ、なんの都合か、中

軍もうごかず、先鋒も進まない。

そこで、思いついたのだった。かねて聞く竹生島は、この海津の漁村から、眼と鼻のさき、

(生きて帰れるか否かも知れぬ戦さの旅立ち。竹生島の絶景に、今世の名残りを惜しみ、明神のおんに、後生を祈って行こうよ)——と。

供の侍は、有教と守教のふたりだけ。

やがて、かなたの島へ漕ぎよせ、主徒は、絶壁をよじ登ってゆく。上に、神さびた一字の社がある。

経正は、その老禰宜から、料紙硯を請うけて、平家勝利の願文を書いた。

なお、その願文の末には、

大將軍、小松維盛、越前三位通盛。

副將軍、薩摩守忠度、淡路守清房、三河守知度、皇

后宮亮経正。

以下、侍大將六人としたため、社殿にささげた後、しばし、ぬかずいて祈願をこらした。

『これは、北陸追討のおん道すがらにござりましたか』

老禰宜は、そのあとで朽ちた社廊の一隅に、昔むしろを設けて、

『猿酒など、お口よごしに』

と、酌いですすめた。

自然な味の、木の実酒である。経正は、ついすごして、陶然と、酔を覚えてきた。

『禰宜どの。近ごろ珍しい馳走に会うたな。……あたりの景も、いちだんと、鮮やかながめに見ゆる』

『お口におうて結構でございました。やがて、比良、比叡に陽のはいるころは、なお麗しい空になりましたよ』

『舟から仰げば、こりや、蓬萊の島かと疑われる。――』

―不断の波に、松かぜ奏で、水精輪の山あつて、天女の栖む所とは、げにこの島のことだろう』

『されば、竹生島の弁財天は、天平のむかしからと申しますれば』

『それよ、思い出した。この御社にはたしか「仙童」と銘くる琵琶が伝わっているはず。――むかし、竹生島に神仙会のありしとき、松室ノ仲算と申す者の童弟

子が、琵琶を弾ひいて、天の法楽に供え、それが今も残っているとか』

『はい。いい伝えの虚実はぞんじませぬが、仙童の琵琶は、社殿の宝物となっておりまする。——聞くならく、平家の御公達は、みな風流のよしなれど、わけて、皇后宮亮の君には、琵琶の御名手と、伺うております。はからず、御参詣のおん契ちぎりに、妙音天の社前において、なんぞ、一曲お弾き給わりますまいか』

『はははは。禰宜ねぎどのよ、無理をいうな』

経正はこころよげに、打ち笑つて、

『幼少より、琵琶は好むものだが、さりとて、仙童を弾じるほどな技能はない。……それよりもこの静かなる場の湖に、まなこを半眼にし、耳を澄ましていたがよい。——暮れかかる雲も何やらん歌うているげな。』

——波のささやき、松風のことは、あらゆるものが天楽の奏そうであらうが。なんで、この自然の音楽をよそに、経正がへたな、琵琶などを、妙音天女も聞こし召そうや』

木の実酒のほどよい酔に、じつは眠たくなつたのか

もしれない。経正は、柱に倚よつたまま、いうがごとく、眼を半眼にうつりと、ひざを抱かかえこんだ。

すると、近くの木陰をよぎつて、社家の裏へ、姿を隠した女房がある。女は、ふたりの子どもの手をひいていた。

おや、というような眼をして、経正は、老禰宜へむかい「どこかで、見たことがある女房だが」と、たずねた。

『いえいえ、お見覚えのあるような上臈じやうろうではございませんぬ』

禰宜は笑う。また受けもしない。しかし経正には、どうしても、見たことがある気がする。どこかで、たしかに会っている。

余りに、かれが首をかしげるので、禰宜はあとからいい足した。

『貧しい薬師の家族でございますわい。はい、まことに、貧乏町の、名もない薬師で』

『はて。都の』

『もとは、牛飼町とかに、おりましたそうな』

『では、阿部麻鳥ではないか』

『えつ、御存じでございますか』

『麻鳥ならば、よう知っておるが』

『これは、これは』

と、老禰宜は、いい過ぎた口を悔いるように、そしていかにも、意外らしい顔をした。

どうして、麻鳥の家族が、ここに来てゐるのか。

聞けば、この老禰宜は、麻鳥の父阿部鳥彦の弟にあたる者だという。

その縁故で、麻鳥もまれにここへ訪うて来る。そして参籠がてら、妻子とともに幾日かを過ごしてゆくが、かれ自身は、社家の一窓で、何事にもわずらわされない読書三昧の幾日かを、無上の楽しみとしてゐるらしいということであつた。

『経正なり、と申せば分かる。いまもおるならば、ぜひ会いたい』

かれのことばに、禰宜は社家へ立つて行き、まもな

く、麻鳥を連れて来た。

麻鳥は、相も変らず、葛布の粗末な袴もしわのままに、経正を見ると、菅むしろの外へ、小さくなつてすわつた。

『おう、やはり麻鳥どのだつたな。奇しくも、ふしぎな所で会つたものよ』

『まことに、このような島で、思いがけのう』

『亡き入道清盛殿のおひきあわせでもあろうず。竹生島の神も、平家の氏神嚴島も、弁財天女』

『何かは存じませぬが、世の流れ、人の移りは、もつと、奇妙でございますなあ』

『されば、西八条殿（清盛）がお亡くなりのは、わけて烈しく世も変り人も変つた。いや、われらも、その後は、さたを怠つていたが、あらためて、あのおりの礼を申すぞ。麻鳥よ。一門の者に代つて、このとおり、お礼をのべる』

『あ。もつたいない』

麻鳥はあわてて、手を振つた。

『そのせつ、あなた様のお迎えをうけて、西八条の御

病殿へ参上いたしましたものの、いかにせん、時すでに遅しでございました。ただお悼みに伺ったような通夜医者でしかございませんね』

『いやいや。御辺の懇ろな診立によつて、二位ノ尼どのにも、どれほど、おあきらめが良かったかしれぬ。われらも、後では、御辺の学説に、よく得心がまいった。それにしても、御辺のごとき名医が、どうして、施薬院の官職も賜わらず、貧しい町の片隅に朽ちているのか』

『いえ、どういたしまして、わたくしはべつに貧しいことはございません』

麻鳥は、すまして答えた。

それ以上は、笑つて何も答えない。

老彌宜は、貴人にたいして、この風変りな甥の不愛想ぶりを、ひどく、恐縮顔だった。それを取りなすかの如く、麻鳥の身上を、問わず語りに、経正へ話すのだった。

阿部家は、伶人の家で、麻鳥も若年までは、宮中の楽寮に仕えていたということ。——そして、崇徳帝の

退位とともに、柳ノ水の水守となり、今でもまだ、その柳ノ水のそばに住んでいるということ。——そしてまた、医をもつて貧民の友となり、生涯、医と水守で暮らすのが、本望であるといっているということなどを。

『……何しろ、まことに、おかしな性の男でおざる』と、この叔父も、常づね、あきれているらしく、いうのであった。

経正は、いちいちうなずいて、一そう麻鳥をゆかしく思った。そして、何を好んで貧乏しているかといった自分の問いに『決して、わたくしは貧しくはない』と答えて、眸を上げたときのその眸を、もう一度、思い出して恥ずかしくなった。

（貧しいのは、自分たちの方であつた。平家の公達と生まれ、いつたい、どれほどな福徳を身に持ったか。前の太政入道ひとり亡つては、一門、かくばかりうろたえているではないか。そのため、戦陣を駆けずりまわり、世に何を益しているか。からくも、榮華の余命を支えようと焦心しているだけのことではないか。

……それを思えば)

と、経正は、眼のまえの一個の男に、なんともいえない気高さと、生の強さを、見るのであった。

世の波騒なみさわも、権力も、毀誉きよよも褒貶ほうへんも、栄華も、麻鳥には、なんのかかわりもない。どんなに血みどろを好む魔物でも、かれの無欲と愛情に徹した姿を、血の池へ追いこむことはできないであろう。

経正は、心のうちで、ぼつと嘆声をもらした。この男に与える物。いつかの礼ぞといって、与えるような物を——自分は何も持ち合わせていないと思った。

麻鳥は、心の王者。自分は、心の貧者だった。「ああ、何を施物せもつせんか」と、迷ったのである。

『そうだ』

経正は、禰宜をかえりみて、ふといった。

『宝器をけがすおそれはあるが、さきにおはなしの“仙童”をお貸し給わるまいか』

『おう、御興を催されましたか。おやすいことで』
と、老禰宜は起たつて、拝殿の内から、やがて一面の琵琶をささげて来た。

虹にじに染そまる手て

経正は、両手で琵琶びわをうけて拝した。そして、琵琶のかすかな埃ほこりを、鎧下着よろひじかけのそでで、そつとふいた。

『麻鳥——』と、あらたまつて、経正は、辞を低うし
ていった。

『故入道殿のおん臨終りんしゅうにあたり、御辺のような真の仁者に、さいごの脈を診てもろうたは、故入道殿にも、さこそ御満足。そのおり、使に立つた経正までも、寝ざめがよい』

『重ねがさねのおことば、身に過ぎまする』

『いやいや、その後の騒さわぎに取り紛れ、いまだ西八条より、礼の使者が出たとも聞き及ばぬ。きょうのふしぎな邂逅かいこうは、故入道殿の、それゆえの、おひき合わせにや候わめ。……そう思われて、ならない。……したが、御辺の生涯を承つては、何やら、礼物などもさし出しかねるが』

『もとより、そのような物戴こうとは、思いもよりません』

『……が、貧者の一灯と申すこともあれば、経正が心をこめて一曲を弾じよう。礼というにはあらねど、所は竹生島、また、今生の一期やも分からぬ。聞いてくれるであらうか』

『ありがたい、おこころざしを』

麻鳥は、両手をつかえて、

『わたくしも、もと伶人の家の子、さすが、家の血すじと申しましょうか、笛琴、鉦鼓、なんによらず、音楽は好む道であります、ただ殿上の管絃は、もう聞きたくない、自分も楽座にすわるまいと、誓うたのでございました。……が、このような仙境で、虚心のまに、御秘曲を伺わしていただけるとは、夢のようなうれしいことです。久しぶりの法楽と申すしかありません』

『楽器は仙童。聞き人は麻鳥。ちと、心たじろぐが……』

『なんの、御幼年より仁和寺の御室ノ君に、就かせ給

うて、琵琶の御名手たることは、京童も存じあげておりますものを』

『琵琶に向かわば、無心なれと、師の御坊も申された。妙音天のおん前も、あら恥ずかし。麻鳥よ、ただ、よその松風と、聴きねかし』

経正は、琵琶を抱いて、き、き、き……と転手を巻いては、弛め、また締める。

そして、絃を調べ終わると、おもむろに、上弦の秘曲を弾き始めた。

緩調、急調、破調。——弾しながら唱歌してゆくうちに、経正は、もうまったく、曲のなかに、溶け入っていた。その面は、無我の人をあらわしている。

いつか、陽は比良のかなたにうすづき、湖上いちめに波色を深めていた。

湖北か湖南か、どこかで、ひと雨あつたような雲が夕べを急ぐように、過ぎつてゆく。

ばらと、竹生島の上へも、わずかな雨つぶを、こぼして去った。

大絃、小絃、琵琶は佳境に入り、弾く人もない。聴

く人もない。ただ微妙な音楽があるだけだった。

——ふと、その破れ扉から樋の梢に絡んでいる藤の花が、一過の風と、こぼれ雨に、ほろと散つて、麻鳥のたもとに濡れついたが、それも知らないようである。いや、麻鳥は、項を折つて、まったく襟元に顔を埋めてしまい、果ては、涙を流している容子に見えた。

すると、そのあいだに、なんの偶然か、薄い雨雲をつらぬいて、湖上の空に、ふた条の夕虹が架かった。そして一つの虹の端は、この竹生島のみどりの中から立っているかと怪しまれた。

琵琶を抱いた経正の姿は、撥の手も、そのひざも、五彩の虹に染まつて見えた。

老禰宜も、何を感じたのであろうか。

『……ああ』

と、突然、ひれ伏して、掌を合わせた。

やがて、曲が終わつてから禰宜はおそろしそうに、こういつた。

『まさしゅう、御秘曲の神技に、妙音天も感応し給うたに相違ありません。皇后宮亮どののおそでのあたり

に、白竜現じ、天女の舞うかとおもわるる、羽衣の影さえ、鮮らかに、眼に見えまいた……』

奇跡を語るかれは、奇跡を信じて疑わない。

汗さえ額に見せて、やや疲れ気味であつた経正は、『御返上を』

と、琵琶を、両手にささげて、禰宜の手に返し、階下にうづくまつていたふたりの郎党を見て、

『さても、思わず長居したの。夜にはいつて、もし先陣の発向に取り残されては不覚。……いざ戻ろうかと、静かにそこを立ちかけた。

有教、守教のふたりは、すぐ小舟の支度、先へ駆け降りて行つたが、もう、足もととは暗かった。

『そこまで、明りを持つて、お供いたしましょう』

麻鳥は、松明をともした。そして険しい坂道を、先に立つて照らして行く。その間、ふたりは黙々と、ただ岩づたいの足もとだけを見て歩いた。

すぐ下に、波が見えた。もうひと足で渚である。

先に降りた郎党ふたりは、小舟を解いて、待ちうけてゐるらしい。

『では、ここで……』

麻鳥は、松明をかざし持ったまま、絶壁のはだをうしろに、別れを述べかける。——しかし、経正は、

『ああよい一日ではあったよ』

とつぶやき、なお、この島を去りがてな容子だった。赤壁ノ賦が思い出される。そういいたげな姿でいつまでもたたずんでいた。

『のう、麻鳥どの。その渚は、経正には、地獄と極楽の境に見える。——小舟に乗れば、もう、再びここを訪う日もあるまい。あすは、戦陣の身、思えば、きょうばかりが、天国であつた』

『なぜ、きょうばかりと仰せられず、あすもあさつても、生きる限りを、極楽とはなさらないのですか』

『今にして、そう思う。……したが、身は武門に生まれ、いまさら、なんと気づいても、もう遅い』

『遅くはございますまい。かの西行法師とやらも、若くして北面の武者を捨て、今も、歌の旅をつづけてい

ると申しますし、権門の醜さをのがれ、自然の中へ隠れた人も少なくはありません』

『そのできぬのが、武門の道だ。また一族のきずなと申すものよ。ことには今、一族みな、境外の乱に、兵馬をすすめ、内には、太政入道も世にない平家の傾きを眼にみながらでは。……はははは』

沈痛な底から、不意に、かれはからからと笑い出した。自分の矛盾が、あまりにもはつきりと、意識に区分されたからである。——いっても返らぬことを、大まじめで深刻そうにいつていた自分が、おかしくもあり、あわれにも見えたのだつた。

『何せい、ただならぬ世ぞ。そちも、つつがなく暮らせよ』

『では、どうしても、地獄の舟へ召されますか。あわれ、琵琶を抱けば、あのような優しき音色をかき鳴らし給うお人も』

『ぜひない宿業』

経正は、小舟に乗った。

なぎさに残された松明は、小舟の影が、暗い波間に